

日本ワイルド協会 第36回大会

(於 東京女子大学, 2011-12-10)

研究発表要旨

研究発表 (13:05 - 13:45)

ワイルドとチャーチルによる主体表象とその手法

堀 祐子 (都留文科大学非常勤講師)

Oscar Wilde の *The Importance of Being Earnest* (1895) はその喜劇性により大ヒットし、現代においても風習喜劇として名高い作品である。出生、異性愛賛美、結婚などは19世紀メロドラマで常用されていたテーマであったが、Wilde はこの作品でそれらをパロディ化することで、当時の価値観や固定概念を強烈に風刺している。それは登場人物たちが終始体面を重視し、内面的苦悩などは一切描かれず、突然大団円となる終幕によって見事に示される。

一方、現在イギリスで最も活躍する劇作家のひとりである Caryl Churchill は、*Cloud 9* (1979) において、トランスジェンダー、トランスレイスキヤスティングなどを行うことにより、性的役割や社会規範などの人間の表面の部分とその実態の乖離を舞台上で文字通り可視化している。Wilde が扱ったテーマを、複雑で最も効果的な演劇的手法を用いて描いたと言えるだろう。

本発表は、Wilde の *The Importance* と Churchill の *Cloud 9* において、いかに彼らが表面と内面の乖離を劇化し、社会的慣習に挑戦したかについて考察し、その流れについて論じる。